
防災教育を普及させるには

(岡 敦子ほか、予防時報222 p.20-29, 2005)

2013年6月7日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

地震、相次ぐ台風上陸など、このところ自然災害が目立っており、それに伴い社会全体の防災意識は高まりつつあり、防災教育の重要性が叫ばれているが、具体的な防災教育活動はまだまだスタートしたばかりといえる。今回は高知の小学校と兵庫の高校で行われている活動に注目する。

高知の大津小学校では「総合学習」として「防災学習」を行った。学習カリキュラムはまず子供たちに勉強の進め方を知らせる。次に自分たちのテーマを決め、計画を立てて、情報を収集し、まとめたものをプレゼンテーションする。その成果を社会に発信し、最後に自己評価をするというのが総合学習の一連の流れだ。6年生は年間70時間防災学習に取り組んでいる。それだけでなく、例えば国語で発表力の向上を目標にしたり、あらゆる科目に防災の要素を入れる工夫がなされている。プロジェクトの流れの最後に、下級生に劇を見せたり、パンフレットを作ったりというアウトプットを設定している。このプロジェクトを通じ生徒たちは、自分で危ないものを探し、乗り越え、さらには人に教えてあげる、あるいは助けてあげる、という能動的な立場に立ち、本当の意味で勉強する。また、大学の先生、NPOの人、損害保険協会の人など様々な防災のプロとのネットワークを、大津小学校の生徒たちが手足となって作っていく。そこが素晴らしい学びを生むポイントになっている。

兵庫の舞子高校では2002年より環境防災課を設置した。目的は防災力を持った市民のリーダーを育成することだ。学校に専門科目がなく、学校設定科目の中で設定していくものだった。この教育を成功させるキーワードとして「ネットワーク」「体験」が挙げられる。例えば、実際に地震を体験された方の話を聞くという体験をするために、外部講師を学校に招く。またネパールのカトマンズのNGOに取り組んでいる地震に強い学校づくりの現場を見学する。そして一番大切にしているのは課題解決型学習だ。上の小学校と同じように、課題の設定、情報収集、レポートにしたり、プレゼンテーションを作り、発表させる。その後生徒同士または自己評価し、足りなかった部分を課題としてもう一度調べる。このサイクルを身に着けると防災教育でなくても、いろいろな教育が可能であろう。防災教育がうまくいくコツとして、外部講師、防災の最先端の人の関わり、どの教科でも防災と関わるよう工夫することだ。英語ではアジア防災センターの文献を読ませたり英語のビデオを見たりする。前もって重要な英単語は勉強させておく。またNPOで英語を使って途上国の人々と交流するボランティアしている。

しかし世間一般的には、防災教育にたいして無関心であり、危機意識が薄い。災害が起こっても自分のこととして考えられない、自分の身に何か起これば行政を含めた周りがやってくれると思っている。また日本はこれまで多くの災害に見舞われてきて「仕方がない」「嫌なことは早く忘れよう」とするだけで、次の動きになかなか結び付かない日本人の気質が原因だと考える。だが、災害発生直後はだれであろうと自分で自分の身を守らなければならない状況に置かれる。だから情報発信をうまく行う必要がある。そこで防災教育のツールとしてのゲームがある。このゲームには正解がない。このゲームの特徴は3つある。参加する人が実際に判断するという行動ができることが第一の特徴、自分がどう判断したかによって、結果が変わってくるのが第二の特徴、最後に相手がいることが第三の特徴だ。いろいろなケースで、どう判断してどう動けばいいのか、ということの日頃から訓練しておくことは大変重要だ。教育委員会からの一方的なトップダウンではなく、防災意識を持ったもの同士のボトムアップのようなネットワークをつくり、そのつながりを重視して具体的な知恵同士をつなぐ教育が防災教育の普及に必要だ。